

子育ては米作り

「子育てに悩んだら米作りを考えよう」

森 清光

「子育て」と「米作り」っておなじ？

私の手元に「稲作こよみ」と呼ばれる米作りの作業を書いたものがある。その地方の気象、品種に合った標準的な稲の作り方を書いたものである。JAや農業改良普及所が日本中で作成し、殆どの農家がこの「稲

作こよみ」に沿った作り方をしている。読者の皆様は、子育てに何の関係があるのかきつと不思議に思われていたと思います。

私は会社に勤めるかたわら、父の作ってきた土地を受け継ぎ、約二十年米作りをしている。最初は「いや・仕方なし」に作っていたのだが、手をかければ

それに応えてくれる稲に気づいた。ちょうどその頃子育てのまっ最中でもあった。

「稲作こよみ」をながめていると、あれっ、子育てと同じじゃないかと感じた。子育てに悩んだ時、「稲作こよみ」を眺めていると、どうしたらいいの不思議と見えてくるのである。むずかしい子育ての本より、すつきりとした子育てのバイブルとなり得るのである。

「稲作こよみ」に沿った子育て

「稲作こよみ」には、まず、稲の生育に合わせその時期の「目標」が書かれている。

- ① 「良い苗を作る」
- ② 「分けつを確保する」
- ③ 「無効分けつの抑制」
- ④ 「籾数を確保する」
- ⑤ 「稔りをよくする」

という風にその時々目標が記されている。五つの目

標を経て成熟期を迎えるわけである。

子育てに当てはめてみよう。

① 播種した籾を保温し、大事に育てる時期です。

生まれたばかりの赤ちゃんに、どうか元気に育つてくれるようにと、どの親も願い、ミルクを与え、おむつを取り替え、だっこしてスキンシップをはかり大事に、大事に育てる時期です。

② 「元肥」といって稲作り中最多の肥料を施し田植えをします。田植え後は保温のために田圃の水を深くし、根付きを促進し、根が大地に付くと分けつを始めます。このころの稲管理のこつは活着したら浅水にし、時々水を切り、根に刺激を与えると共に、根が酸素不足にならない様にこまめに水操作をすることです。収量確保のため思いっきり分けつを助けてやります。

子どもは色々な事に興味を持ち始め、親の「元肥」を肥



やしに多くのことを吸収し始めます。小学校中学年位までの時期でしょうか。温かい水ばかりでなく時々水を切り刺激を与えつつ色々な情報（酸素）もいれてあげ、友達からの情報も大切に、こまめにかまってあげることが大切でしょう。

「元肥」がうまく効いていれば、どんどん「分けつ」することでしょう。

③放っておくと、どんどん分けつし幹数は増えますがあまり増えすぎると籾が実った時に不実籾（本当に実らない細い籾）が多く出ます。水は「中干し」といい完全に圃場を干し上げ、肥料は与えません。この時期に肥料を与えると無効分けつが進むばかりでなく「幼穂形成期」といつて籾の赤ちゃんが籾の中心でできるのですが、数が多すぎると不実籾が多くできてしまうことと、節間（籾の背丈）が延びすぎ、ひ弱な倒れやすい籾となってしまいます。肥料が切れて籾の葉は黄色くなってきましたが籾自身の持っている生命力を信じ、心を鬼にして我慢、我慢が大切

です。

子どもはと見ると、色々な事を吸収しつつ、あまりの情報の多さにアップアップ、特に最近の社会は子ども自身が咀嚼出来ない情報が溢れています。今まで通り親が肥料を与え続けると……。子どもの力を信じて少し子離れの練習をしましょう。我慢する事も教えましょう。将来成長したときに体のどこかにその力を秘めているはずですよ。

④ぐつと抑えつけた籾に間断的に水を与え第一回目の穂肥を穂が出始める二十日位前に、第二回目の穂肥を穂が出始める七日位前に与えます。この時期になると籾内で籾の数も決まり、幹の背丈の成長も止まります。いよいよ穂が出る準備に入ります。人でのう思春期の入り口に立った状態でしょうか。

親にとってもむずかしい時期に入ります。くつきき過ぎてため、突き放してもため。学校では殆どの子どもが進学のための勉強に追われ、「偏差値」やら「内申書」に脅され、塾に通い、家でも勉強・

勉強、休む暇ありません。そのコースから少し外れると人生の落伍者のような感覚にさいなまれます。

本当は、親はこの時期そつと肥やしを与え、間断的に水も与え、その子の将来生きる力を蓄えるように援助してやらねばならない時期なのではないでしょうか。

⑤いよいよ穂が出て穂が稔る時期に入ります。一つの穂に八十〜九十粒の籾が付き、一粒、一粒の籾が成長、登熟します。穂が出る時期は水を与えます。その後は間断的になるだけ遅くまで水を与えます。肥料は籾と相談して与えますが、これは見極めには高度なテクニクを要するので殆ど与えません。

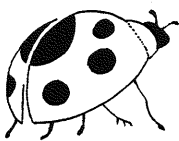
いよいよ成人前です。高校を卒業し進学あるいは就職、大人へのアドバイスを与えると共に子離れ、親離れの時期です。もう親から子へではなく、お互いに大人としてのつき合いが始まります。必要に応じてアドバイスをしてあげて下さい。

⑥収穫となります。丹精込めて作った稲を米として供する訳です。収量に一喜一憂し、品質に一喜一憂し農業の喜びの季節です。ところが労働の割に米は安く、特に最近価値下がりの方で憂鬱な気になる季節ともなりました。

子どもも成人し、大人の仲間入り子育てに成功したのか失敗したのか人であるだけにわからない時期です。でも子どもを信じることによって絶対失敗はありません。ところが最近の社会情勢、卒業はしたが就職できない若者が増えています。憂鬱なことです。

農薬はどう使うか

米作りと子育てを対比して話を進めてきました。でも農薬の話は入れませんでした。環境汚染、食物汚染等の問題が叫ばれる今、私たちの子孫にきれいな



地球を残すためにも、米を始めとする野菜をできるだけ農薬を使わずに育てることは大事なことでしょう。

実は私の手元にある「稲作こよみ」を見ると農薬の使用時期が記されています。「種子消毒」「苗立枯病消毒」「白かび病消毒」「ムレ苗防止消毒」以上が田植え前、田植え後に「イネミズゾウムシ防除」「除草剤散布一回〜二回」「葉いもち防除」「穂いもち・紋枯病防除」「第一回病害虫防除」「第二回病害虫防除」と実に十回を超える農薬を使うのが標準的な管理法です。もちろん状況を見てこれより少ない人、多い人があるわけです。

農業書でもないのにあえて消毒内容を列記したのは私たちが子育ての間に子どもに向かって何度も「農薬散布」をしているのではないかと思うからです。子どもに「あれしちゃういけない」「これしちゃういけない」「早く、早く」「ああしなさい」「こうしなさい」「勉強、勉強」とどなたも思い当たることがあることと思います。一つひとつのことは正しいのかわかりません。

農薬に「複合汚染」があるように子育てにも「複合汚染」があるのではと心配します。

ちなみに私の米作りは「種子消毒」と、「除草剤一回」の二回におさえています。あとは稲自身が持つ生命力を期待して栽培しています。少々収穫量がおちても、毎日食べる米です。安全な米を私自身が食べ若干の消費者の方に食べていただければ満足です。

子育ても子ども自身の持つ可能性を信じて「農薬」を控えた子育てがいいのではないのでしょうか。

米作りの基本は水のかげひきと施肥の時期

色々書いてきましたが、丈夫な稲作りの基本は水のかげひきと、施肥の量、時期だと思えます。以上の二項をこよみ通り間違わなければ丈夫な、たくましい稲が育ちます。ほとんど病気にかかりません。かかっても自力で治ります。それほど生命力を持った植物なのです。でも留意してやることはあります。

水を入れたり、干したりするのはなるべく早くや

ります。田圃に溜まった水は保温力があります。稲をぬるま湯に入れた様な状態です。なるだけ田圃の温度が低い朝、水を出し入れするのが最も稲に負担をかけません。また、肥料は少し少な目に与えます。肥料が過ぎると、葉が繁茂し、風通しが悪くなり、稲の大病「いもち病」などにかかりやすくなります。一度田圃に入れた肥料は出すことができません。様子を見て足りない様なら追肥すればいいわけです。あえて子育てと対比しませんが感じられる処があると思います。

おわりに

日本の穀物の自給率が四十パーセントをきつたと報道されています。もし何かの事情で輸入できなくなつたらと心配している多くの方がみえると思います。

子育てにとつても同じで大人が作り出した今の社会の状況に子どもが翻弄され、もつと大事にしなければならぬ事をどこかに忘れて来たのではないかと思えます。

「稲作こよみ」をながめながら、自信を持った、子どもを信じた子育てを考えようではありませんか。最後になりましたが、「稲作こよみ」を手に入れた方はお近くのJAに頼めばもらええると思います。手に入らなければ私にご一報下さい。お送りします。

(学校法人 黄柳野学園理事)